# ミオヤの光

## 弘誓の巻

### 聖經の友（あみだ經をよむ友どち）

常に心にかけてこの聖經をよむ人はこの御おしへにしたがひてかの微妙安樂の淨土に生せむことを欣求し、彌陀の本願に歸したてまつり後にはかの淨土にいたり、もろ〳〵の上善人と共に一處に會する友なれば聖經の友とは名づく。世のなかのあさましき淤れたる友にはあらで同じくこゝろの深き後のかぎりなき時をまで期しての友なれば、まことの友ぞかし。

こゝかしこ身はへだつともちぎりてしこゝろは聖の園にあそばむ。

この世の習ひ此かりの身は西東と千里の山百里の雲はへだつとも、この經をよむときに心は共にかの淨きみ國の御園にあそぶおもひまたたのしきに非ずや。

よむ聲に心もいつかさそはれて、たのしき園にめぐりあそばむ。

釋尊の說たまひし御言葉にみちびかれてかの極樂の七重の寶の樹のつらなりしはやしのうち、金の池のほとりなどに徐々として逍遙するの想ひ、豈たのしきにあらず





や。

子をおもふ親のこゝろをしれかしと經のたよりにきくかうれしき。

子とは六のみちにさまよひしわれらなり、それを親とは淨き御國をかまへてまちわびたまふあみだほとけなり。經のたよりとは釋尊が此世に出まして彌陀の本願をきかしめてすゝめたまふ。若しわれらこれをしらずばまたむなしく三惡の火坑に沈むべかりしを、今この御法にあひたてまつりて淨土にまゐる身となりしことのうれしさ。

この經をよむたび毎におもふかな、ちぎりし友のふかきえにしを

この經の敎によりて信を定め、佛の本願に乘じて淨土をねがふ身はみな同じく蓮の上の友なれば、この經をよむに就てもその友をことに思はざるはなしとなり。

よそごとに聞やしつらんかの國をわが故鄕としらぬむかしは。

この經にときたまひし微妙安樂のさまを聞きながらもこゝろなきものには、よそごとに聞くならん。佛の御意を領解しぬる上は阿彌陀佛を慈悲の父とし、極樂をもて我本國といふべけれ。されどまだしらぬむかしはよそのことにぎゝやしぬらんと。

かざりつゝたれをまつとやおもふらん、親のこゝろを子はしらずして。

あみだ佛は法藏因位のむかしより平等一子のやるせなき御慈悲より、十方淨土にすぐれたる極樂世界を莊嚴してまちわびたまふ、ひとへに我らがためなれども、われらまよい子はさともしらずしてむなしく六のちまたにさまよふなり。

ながき夜のねむりもやがてさめぬべし、あかつきごとによむ經の音に。

ながき夜とは無明の中にうちねむりて無始よりこのかたさまよひしも、あかつきのねざめのごとくに、まよひのねふりもやがてこの經のおしへによりて淨土に生れゆきて、大覺朗然としてさとりのねざめとなるべきなり。

法の緒を心のたまにつらぬきし、はちのすの友はこひしかりけり。

ずゝのたまに緒のとほしたるごとく、このみだの本願の法のいとを衆生信心のあなに通しておなじく一蓮の身となるべき友は、かりそめのこの世ばかりの友とは

ことなりて、ゆくすゑかぎりなくたのもしくも戀しくもあるべきにこそ。

きよきあしたしづけき宵によむ聲と、心もにしにすみわたるかな。

清且はやくおきて聲ほがらによみ、しづかなる宵などゆる〳〵と經をよむときは、聲と共にこゝろも西の淨土にすみわたるなり。

○

別紙維摩經により少しく信仰の御すゝめまでに認め候もの、若しも御主人の御耳にも相成候はゞ幸ひに存候。

餘は拜眉萬々可申上候。旬々和南。

釋迦如來御在世の時、毘舍離國に維摩居士と申する、えらい在家のぼさつが在まして、此居士には釋尊の御弟子衆も、悉〻呵責を言はれぬものは有ませぬ。故にみな恐れて居らぬはなき程の御方でしが、或時病氣となりて、夫が爲に多くの人々を敎化なされました。維摩經と云ふ御經が、其病中の說法であります。其御經のはじめの方を少し書ぬきを認めませう。經に、時に維摩居士が病相を示して病牀につきました。する〻國王や、大臣、其外長者衆などが、みな御みまひを申すると、居士は其訪問したる衆のために廣く說法しまするのに、諸の仁者よ能く御聞よ、今此身は無常で、きまつて常住なものではない。無力無堅で自分の命をいつまでも持つて居る力の無いものにして、速に朽るの天則は免れませず信ずべからず。苦の器、惱の道具で衆の病の聚まる所であるから諸仁者よ、かようなる身は、明智者なるものは決して怙みにはいたしませぬ。てうど此身は聚沫のようなもので、しかととつて持せ置ことは、できぬものであり、泡の如で久くもつものでも有ませぬ。是身は陽炎といふて山に住む鹿が遙かの處のかげらふを見て渴愛から水だらふとおもふて走りて近にいつて見れば何にもない、ようなものである。此身は芭蕉のようなもので、いく重のかはをむけば眞の身はないようなもので、是身は幻の如く顚倒より生じたるのである。是身は夢のやうなもの眞實なものでは有ませぬ。是身は影ぼうし見たやうなもので業緣から現れたのである。是身浮雲のようなもので須臾にして變滅す、是身は電の如くにしてすぐに消えてしまふ。是身は我ではない。地水火風のかりにあつまりたるものにて實際我ものではない。此身は智なし、草木や瓦や礫と同じ土のかたまりである。是身の動くのは風力のためである。是身は穢き不淨のものである是身は百病のあつまる處、毒蛇のすまいである。夫であるから決してどこまでもそう執着すべきほどの貴重なものではない。であるから諸仁者よ患厭すべきものである。けれども當に樂欲すべきは佛身である。此身を捨て淸淨眞實なる佛身となることを樂欲なされよ。そのわけはなせといふに、佛身といふは卽ち淸淨法身である。土のかたまり煩惱のかたまりの人身とは異である。無量功德と聖き智慧より生じ戒と一心と智慧とより生ず。大慈大悲卽ち如來は慈悲と喜と捨とより生ず。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧、六神通、三明、三十七道品より生ず。止觀、十力、無所畏、十八不共法、一切善法、眞實不放逸、是の如く無量の功德のあつまりたるかたまりが卽ち佛身と申上るのであります。であるからしてどうしても捨なければならないものは、よし捨つるとも眞實の法身は求めなければなりませぬ。この如來の法身を求るには菩提心を發すべきものである。菩提心とは卽ち無上の佛果を得んと欲する心なりと。

この佛身を求むるほだい心とは我淨土の信仰によれば卽ち阿彌陀如來の本願力を信じて、我こゝろをあなたに捧げてあなたの聖き旨が我が方に來るやうに、あなたの聖き御名をよびあなたの尊き聖きみこころを念じ奉る時は凡心と佛心といつしか取かへて下さるのである。我は罪ふかき惡き心なればこれをすてて、あなたの尊きみこころを念じまする故にあなたのきよきみこころが我がこころに入來るが故に、何となく有がたく尊とく感じられて來るのであります。

是く如來の尊きみこころによりてかたまりたる心識とてたゞしいはこのかりの肉體はそつくり此土に捨置きて、神識は聖き樂しきみ國に生れ、神識がこんどは相好圓滿秋の月よりも麗はしきよそほひ、神通智慧無量功德が顯はれて來るのである。左ようなる心やすがたと顯はれるのは今の此如來を信念するこゝろがさうなるのであります。かりのからだは維摩居士がいわれた通り終に朽ち果てしまふのであるから、いかゞにもせんこの心識に聖き如來の恩寵に靈化して聖き淸淨法身の佛身となるように聖きみなを稱へてねてもさめてもわすれぬこと肝要にて候。前に維摩經に佛身とは無量

功德の身と申されましたのは、說つくすことも出來ぬ功德なれども、萬德恒沙の名號を稱へ、あなたの聖意を仰ぎますれば、自然と其功德はみな、行者の方にソックリと如來の萬德をゆづり下さるのであります。只管に信じて聖き御名を稱へなされ。無量壽經に、一生の勤苦須臾の間にして後無量壽國に生ずれば壽樂極りなく、永く道德と合明すと說いてあります。

至心に信じ樂うて彼國に生ぜんと欲して御名を稱ふるが本願の念佛にて淨きみ國に生るべき御約束であります。

○

此ほどの御書翰拜見致候。みな樣がかはる〳〵御すぐれ遊されぬとのことをうけたまはり、ついては定めて御看病つかれ等のことにて候はむ。それこれ何方御こゝろつかひのほどをと案じ申上、處はしばらくへだち居ましても同情同感まことにおもひやられます。アナタ方は同じく、唯一の如來をミオヤとあがめ、みなばさつの同胞にてあります。しますれば同胞のアナタ方が病魔のために侵され、ことに同じ同胞にても御婦人衆は天性としてこゝろのよわきのがあたりまへなのですからまことにはるかに同情をもて案じ上げずに居られませぬ。しておもひ合すればいと御慈悲ふかきミオヤなる如來は愛し玉ふ聖子なるアナタ方に對していかばかりかは御こゝろをいためさせ玉ふぞと伏しておもひ上げます。

それについてもわたくしは思ひまするから申上ます。吾愛するところの同胞のきみたちまでに。此肉についての苦しみと惱みとには限りがあります。うか〳〵として若しも心靈をながく闇黑猛火の中に陷し入るるときは、きわまりがありませぬ。さてまた佛敎を信する人のよ、申ことでありますが、もろ〳〵の苦がありますと是も前世あれも約束と申しますけれども、成るほど夫もそうでありませうけれども、それよりはなほ進みてかようにとりまするがなほよろしいのであります。この肉體のかぎりある苦しみのために一心をおこさせて、心靈のかぎりなき幸福を與へむがための御方便であります。

人間は艱難も苦難をも經驗せぬ人は人のおもひやりもなく、また自分の心靈のことについても眞から氣つきませぬ。ことにいかにふかきミオヤの御じひをもふかく感じませぬ。ミオヤの御めぐみによりて日々明き光りも淸き空氣も新しきかてをもあたへて下さる是は何のために斯して下さるといふのに、この生命をあたへ玉ふのは、かぎりなき心靈のためにてありますけれどもそうはおもひませぬで、たゞ氣まゝに自由くらし、一生肉體のことばかりにくつたくして夢の中にむなしくくらして、心靈はます〳〵けがしとほてしまふのであります。しかるに苦難にあひまするために自分のつみのふかきことも感じミオヤのたふとき御慈悲をも感じられますよふになれば永遠のかぎりなき幸福を獲られます。

それでありますから前世の因緣を今果す爲ばかりですと丁度前々の借金を償ふよふなので苦しみ甲斐もなく、本のしかたなしのあきらめであります。そうではありませぬ。ミオヤの御じひが得ました上はなやみも苦しみもみな心靈の幸福をうるため信仰をかためるため、是がために無限の幸福をうべき御慈悲をふかく感じさせんが爲の方便とおもふて、ます〳〵すゝみて如來のみひかりをおもひ御めぐみを念じますれば、いよ〳〵御慈悲がふかく得らるるのであります。

我心に具る苦しみと惱とはいか成方にても之を取除きて呉れるものは有ませぬ。たゞひとりのミオヤなる如來をまごころにたのむより外みちがありませぬ。

また自己の心靈に眞の幸福を與へ下さる方は、ひとりのミオヤなる如來ばかり與へ下さるのであります。

ミオヤは晝も夜も常恒不斷に御慈悲の光のなかにおさめて愛護して下さるのであります。

たふときアナタの御名をとなふるはあなたの御思召をわたくしにあらはるるよふにいのるのであります。

眞に如來の御じひを深く得ますると人は不幸も幸福と變じ肉の苦のために心靈の妙樂を享受するよふになります。善導大師は諸佛の大悲は偏に苦者に於てすと仰られましたのは、如來の御慈悲はひとへに苦みのある處にふかくかゝるのであるとのことであります。

衆生の方になやみふかければふかきほど如來の大慈悲もふかくかゝるのでありますから如來肉眼にこそ見えねいづれの處にも御こゝろはあまねく充みちてましませば、ただまごゝろに

ア、ミオヤよ如來よ。あなたの聖なる御こゝろをもて我にそゝぎ玉へ。あなたのあたゝかなる御じひをもて我に安慰を與へ玉へ。あなたのきよき光をもて我罪をきよめ玉へ。あなたの天地萬物にのこらず持たまふつよきみちからをもて、わたくしどものよわきこゝろに力を與へたまへ。われ〳〵ごときこころのよわきものに力を與へむがためにあなたは大願をおこし玉ふ。ア、ミオヤよ、いか成ることをも忍ぶことをうる力をあたへ玉へ。と、尊き御名をとなへていのるとき、あなたの御ちからはこなたのこゝろを助け玉ふ。たふとき御名をとなへて御じひを感じ、いか成ることも忍び通してのちにこそ、まことに〳〵ふかき〳〵ミオヤの御じひはたしかめらるゝのであります。なほ申上度候へども後便にゆづり候。

○

日かげの駒のあしなみいとはやくもはや今年も秋のなかばも過にけらし。其のちは御無音いたして候まゝ、

無量壽經の聖文を少しく和解してものして申進候間御讀みなされて御信仰の養となされ候へかしと存じ候。

釋迦牟尼佛は先に阿彌陀佛の淨土莊嚴のさまをこま〳〵と御說き明しなされて心靈の歸着すべきところをしめし、つぎに此世のさまを說きしめして肉體にのみ執着するひとのあさましさをしらしめたまひし。

無量壽の聖城は微妙安樂にして淸らかなることはかぎりなく、これをきゝし上には誰か力めて聖き名にきよめられて眞と善と美きとに人々のこゝろは成るべきもの、聖き旨を念ずれば自から自己のこゝろもきよくなるべきは自然の道理にてぞある。凡そ世の中に　あみだ佛の聖意と光とほど眞善美なるものはあらじ。かの御名をよびつゝ御こゝろを仰ぎ奉らば、いつしか我こゝろをもすみわたりて、明く潔くなるべきものぞ、みだにかよふこゝろはいよ〳〵深くなるにつけ、ます〳〵かぎりぞしらぬ道にすゝみゆくなるぞ。各つとめはげみて自ら之を求めなされかし。しかる時はまどひのきづないつしかきれて、五惡のみちはやがて閉ぢぬべし。聖き道に昇ることはきはまりなく、聖き御國は往き易くして人なし。其國逆違せず自然に牽く所なればなり。其國は眞理にかなふ處故に逆違せずとは申なり。いかにとなれば、人は皆無限の生命をねがふ、かし處は無限の壽なり。人は皆無限の智慧を欲望す。彼しこは無限の智慧を得る。人は老病死とすべての苦憂をきらふ。彼處は老病死及び苦と憂とのなき處、まことの靈福と生命とは彼處に到らずして何處に求めん。彼國は心靈のよろづの德と幸福との花の開きたるところなり。

精神界に必ず得らるべき靈福を求めずして眞理ならぬ老病死の天則をまげていつまでもながらへ、苦憂をなからんと欲するもをろかなり。何ぞよしなき事を心にすてゝつとめて道德を求めざるや。まことのいのちと樂とは必ず極りなく得らるべきものぞ。

しかるに世間の人は薄俗にして五欲の樂ともいはゞ、よろづをすてゝも爭ひ求め、此劇惡極苦の中に勤身營務て自ら世をわたり尊卑上下のへだてなく、憂苦なきものはなし。

屏營として愁苦して念を累ね慮をつみ、煩惱の爲に追つかひされて心の安き時もなく、田宅奴婢あればあるにつけ憂へねばならぬ。家財產物なければ無きによりて心配があり、一あればまた一がほしくなり、是一つれば是が不足となり、欲求はかぎりなく、滿足は得がたし。

朽はつる物の爲には是非とおもふて煩惱しながら、自己の一大事の事には心にかゝる端もなし。あたら月日を空しく暮し、命は限りあるものなればやがていのちの暮となりにけるも、あへて善を作せしとか道德のおもひもなく終りぬれば、身死して當に遠く獨り去りゆかねばならず。己が心のまに〳〵ゆき先の趣くべき處善惡の道しるものなく　獨り生れ獨り死し獨り去り獨り來る。自己の行を追ひて苦樂の地に趣く、自ら之を當くるので代るものなし。窈々冥々として別離すること久長なり。消路同じからざれば會見期はなし。何ぞ各强健の時に努力　善を勤修し精進に痩世を願せざる。極長生を得べし。如何ぞ道を求めざる。安んぞ須つべき處ぞ、肉體にいつか至極の幸

があらふかと待つとても天より降らず地より出でず。唯つまりは白骨となるのみ。

あまりながくなり候間御經のぬきがきを半にしてまた侘のことを少しく御はなし申候兼々も認めて上げましたが、元祖大師の御詠に

あみだ佛にそむるこゝろの色にいでば
　秋の梢のたぐひならまし

この御詠のこゝろを案ずるに、元祖大師とていまだ念佛門に深く染こまぬ若き昔は、平凡の人の如くに世の五塵六欲には染ぬことはいふまでも有りませんが、夫にても十八の時より四十三までは比叡い山の奥にこもりて一切經を始め和漢の書籍に眼をさらし、經をしらべ祖釋を研究し其樣なことにのみ專心に屈たくして、まだ世間から見たならば立派かはしらねど實際の修行の方面より見れば、まだ〳〵青くなまめかしたるこゝろのすがたにてぞ有。四十三より一心專念彌陀名號ねてもさめても彌陀より外におもふことなくいふことなく、年久しく功つも今は彌陀の聖旨の眞と善と美とに染こみしこのこゝろは、めにも見えたならば實に秋の紅葉にたくらぶべし。

其あみだほとけの聖旨に染みしこゝろの奥は、うれしいのでありませうか。はたかたじけないとか尊いといはふか、何といふて其心の色を名づけませう。

秋くればたつたのもみぢばかりでは有ませぬ。人しらぬ奥山の紅葉もいろつくことは同じことなれば、私どもとて常に念ずる心はいつしか難有といはふかうれしいと云はうか心の奥に染まるのであります。

○

日かげのこまのひまをすぎぬるてふ、月日のときこと、月を見るすきさへなきに、もはや今としてもいつの間にかは秋ははやすぎて、冬のはじめとはなりにける。うけたまはれば御老母さまには、八月頃よりながらくのあひだ御いたつきにてあらせられ候よし、此ほどは御こゝろよふならせられしことにきゝはべり、おどろきてなによりよろこび申居候。御玉づさに御夢のうちに御歌の事不思議なることにて候。そは全たくふかき御こゝろざしより感せしならむ。まことに惟れば、此の世のさまは日々に斯く明し暮しつる事も、みな夢かまぼろしのことくにて候。明日のたのしみとまつまも





なく、いつかきのふのゆめとなり、來るとしはと待つとも是またしらぬ間に去年の夢とはなりにける。まことに期して居るこの身も、おもへばあやしげなるものにてぞ有ける。さて直ぐさま御目にかゝりて物がたりなどいたし度は候得共左もまゝならねば、取まじりながら古德がたの法語などをしたゝめてまゐらせ候へば、御なぐさみのために御よみたまへかし。

善導大師六時禮讃日没時常の偈に云く、

人間忽々として衆務を營みて、年命の日夜に去ることをさとらず。燈の風中に滅なんこと期し難きが如し。忙々たる六道定趣なし、未だ解脫して苦海を出ることを得ず、云何ぞ安然として懈怠せざる。各〳〵け強健有力の時、自策自勵して常住を求めよ。

此偈を略解す。夫世間の人々は忽々といそがはし〳〵といふて此營業のために心をとられて、年もいつの間にか暮るゝ。暮るゝに隨て此命も日々夜々に少しも間斷なしに命はちゞまりて去るのであるけれども、それとはきがつかずして居る。譬ば風の前の燈のいまにも滅なんことも期しがたき此いのちをもてして、またこの業に隨て艸露は忙々とまつくらにて六道のうち何れにとて定まりて趣くべき處さへしらぬに、いまだ此苦界を解脫すべき安心も起行も定めずして云何に安然として驚きも後のおそれせず、實におろかではありませぬか。各きゝなされよ、強健にして有力の時に自ら策ち自ら勵みて、常住といふて不老不死の都を求たまへかしとなり。(是までが無常の偈の解)

また善導大師の勸化の偈(大師が衆生をみちびくによまれし偈文)

漸々鷄皮鶴髮、看々行步蹣跚、
假饌金玉堂に滿ども、衰殘老病免れがたし。
任汝、千般の快樂、　無常終に是到來。
唯徑路の修行あり、　但阿彌陀佛を念せよ。

(解)、に漸々に鷄皮鶴髮なり。看々自身をかへりみよ、行步に蹣跚するではないか、たとへ金銀珠玉は堂のうちに充滿ずとも衰殘老病はまぬかれ難し。任汝、千般の快樂あらふとも、無常は終に到來す。唯この無常老病死を出離るゝ徑路は一道ばかりにて、

それは但あみだ佛を念じて淨土に生ずるより外になしとなり。

元祖大師の御法語に、

いけらば念佛の功つもり、死なば淨土にまゐりなん、とてもかくても此身には、おもひわづらふことぞなき。

此御法語の意まことにありがたくおもひ候。斯く安心さだめて居り候上には此世にながらへばながらふるほど念佛の功をつみ德をかさね、此世に於て一日一夜のつとめは淨土にて百年の善を作すに勝りたりと、しかるに若し露の命の終りなば善をきはめ美をつくしたる大乘善根界に七寶蓮華の上に生れ、阿彌大法王萬德圓滿の相好を瞻仰し微妙の法を聞き無生法忍をさとり、觀音勢至そのほかもろ〳〵の大ぼさつ衆を朋良とし、三十二相莊嚴の身は光り秋の皎月よりも潔く、三明六通まどかにして、居ながらに十方法界を見聞覺知し、上は十方の諸佛に奉供しまた法を受け、無上のさとりを得、下は十方無邊の衆生をおもふがまゝに濟度することを得。十地の願行おのづから彰れ終に無上佛果を得る身となるべき淨土に往生しぬる身となりては、とても此身にはおもひわづらふことぞなきとなり。

また元祖大師の御詠に

あみだ佛にそむるこゝろの色にいでば秋のこずゑのたぐひならまし。

此歌の意、おもひにしみてかたじけなく候。大師は御年四十三のときはじめて專修一行の念佛に歸し晝夜六萬の稱名もおこたりまたふことなし。しかるにいまだ初めて念佛に歸したまひし頃は、是まで一代の經に眼をさらし、あらゆる聖經に心をそめぬれば、いまだ是ぞと御こゝろにしみてそめらるるものなかるべし。しかるにいまは一すらに念佛し、こゝろにおもふものは萬德圓滿光明遍照のあみだほとけより外に念ずるものも想像するものもなければ、年を經るに隨ていよ〳〵こころに染おもひにとふして漸々にしみこみたる、あみだ佛の光明と慈悲との色にそみこみて、若しもこのこゝろがめにも見えたならば、濃やかにいろつきたる秋の梢のもみぢなしたるいろに比類すべきとなり。われら心にわすれやすく想にそみがたく是ぞとて心に色つきしこともなきは怠りがちなるほどこそはづかしけれ。





蕭しみて啓す。時しも秋のなかば、なにとなく物さびしき折から、かねていかゞと懸念しつゝ、歸京の時を期し、また一たびとのおもひもいまはむなしくなりぬ。

故猪狩隆成君の御訃音に接し、いまはたゞ。御名をとなへて御回向を申上候より外なき、なきひとの數に入りにけりとは、げに世は無常、老病死はいかなるひとゝて免れざる世のならひとは申しながら、いま更のようにおもはれける。しかしながらおもんみれば、釋迦如來金剛不壞の御身に於てさへ、ばつたい河のほとりなる、つるの林にて、二月十五日の夜半の月と共に、ねはんの雲にかくれたまひぬ。されば三十二相のうるはしき月の面だに赤栴檀の煙りときえたまひぬ。一たび生れてつひに死に歸せざるものとて何にか有べきぞと、道理はさりとはしりながら、悲歎は人の情にて、いかに免るべきものぞ。併しながら、君は御生前御すこやかなりし時、一すらに彌陀の本願を仰ぎ、もはら稱名三昧なりしこと數年、たとひ御病氣のためにしばらく廢したればとて、已に彼淨土に金蓮の上にたしかに靈籍をさだめ置しことなれば、たましひは今は、花のうてなに昇りしこと、また何の疑ひかあらむ。いまごろはさだめて、花開きて、佛を拜み、尊きみのりをきゝ奉つることならむ、なむ阿彌陀佛。

○

嚴しき御寒の時、いかゞ在らせ玉ふ哉、

御母さまよりの御書によれば、本月二日御出發にて御地に轉じなされ候との御事、其御地は東京とは風俗言語も大に異りまた御友だちも有ませぬので定めし御さびしき事と存候。且また家庭上のことから萬端是までは御母さまと御一緒でありましたのに、今度は御主婦と成て處理しますのは初めほどは御困難の御事と察上候。

しかれども其れが婦人として世にたちて活動すべき舞臺なので、如來さまから婦人と云ふ俳優の役割を命せられて此人間界に出でたる已上は是非ともに、自己の役をば果さねばならぬ天職を以て世に現れたのであります。同じく其役をつとむるのには潔よく活に愉快に天職に盡さゞればとても名優とはなれませぬ。是迄に御讀みなされし婦人雜誌は唯なぐさみの本ではなく、今日正しく其任に當て天職を果さんとするに付ての龜鑑なのであります。また常に御稱へになる御稱名も卽ち、大なるミオヤ如來

さまの御名にて在ませば、其大ミオヤさまゝ、何の處にも在まさゞる處なき御身にいませば、あなたが念ずる處に、夜も晝も、かげの形にしたがふ如くにましませば、其如來さまを心に念じて、現にここに在　と信じ、いか成ることも御たよりとする時は、心のすべてのなやみにも、何れにも力に成ます。

あなたに婦人の主婦たるつとめを立派に果させてとの思召によりて、如來さまから此度は正しく命せられたのでありますから、願くば喜びいさんで其役わりをつとめて下されませ。

○

野山の梢も吹く風の音も秋の氣に感じてや物寥しき折柄承はれば過にし頃より暫らく御健康をくるはし玉ふとの御事、そは氣候との劇戰に負傷したまひしものと存候。願くば國の爲め家のため、殊には靈を宿す處の神殿たる御身體なれば深く〳〵御自愛したまはんことを。

此器械的生理的なる御身體の事につきては斯道に經驗ある醫師先生に一任して疑ひ玉ふことなかれ。

また進んでは生理自然の一大原則は天に在ます

大みをやの掌どられ玉ふことなれば、身心の全幅を

大みをやに御任せまつりて御身心ともに其權能にもたるる時は、大に心が輕く安らかに感じらるゝものにて候。世には隨分理に闇き族ありて、身の病氣にて氣力も羸衰せるにも拘はらず、精神にまで非常に氣をもみて重荷とするものあり。また世の中には天に任するといふもとても仕方がないから天に任すといふごときは何やら無理往生のやうに思はれ候。よりは進んで勇み進んで天に在ます、大みをやの光明常に輝く處に精神を逍遙せしめ、

大みをやと共に融合し快樂的に一任するに至つて眞に活きて進んで任ずものと謂つべし。

精神を大なるみをや卽ち眞神と合する時は身體に病ありても精神に病なし。身の病は自然より借りたるもの、身の內の自然と外界との自然と調和のできぬ處から傷めらるるは據なし。唯調和の出來る策を講ずる外なし。





大みをやの威力を以て力としてあれば、精神は健全にてあり、精神健全なれば精神を以て身體を保護し助力す。

身體若し病む時精神ともに病む如くば身を保護し助力するものあるなし。必ず斃るかしからざれば長く病むに至る。大みおやは天地萬物の備を以て衆生をいかす。心を以て進んで一任するもの何ぞ夫れ快に向かざるをえむ。猪狩君よ明き光、鮮なる空氣、溫なる氣すべて、

大みをやの賜にあらずや。

食器に盛れる物より藥壜に入りし物、其本はみな、大みをやが天地萬物の中に備へ玉ひし生物鑛物等より取りたる物にあらずや。　生命の源にまします、

大みをや賴もしいかな。ア、慈悲深き　大みをやよ。

きよき同胞猪狩氏のために、加被力をたれ玉はんことを希ふ。

君よ。靈活なるこの新鮮の澎氣の中に、すべての病を除きて快とし活す力を與へ玉へり。一念に全宇宙の澎氣を呑み盡す如き觀を以て吸ひ玉へよ。

右御訪問までに、

大みをやのみむねをかしこみて申のべ候。

隆子さま定めて御看護つかれにおはさん、願くば御自愛あらんことを。

靜子さん、天に御いでなさる、大きいおとうさまに向つて、おとうさまの御病氣をはやく能くして下されませと申上ておがみなされよ。天においでの大きいおとうさまはおとうさんがあなたをかわゆく思召如くに、すべての子どもをかわゆく思召したまふ。

○

蕭白殘暑尙嚴敗候折云何被爲在候哉伺上候。

愚納各地巡廻終りて昨日漸く歸京候。承はれば御老母樣久敗御病氣之處竟に先月十七日西逝爲され候との事、

實に生者必滅の習ひ會者定離の掟とは兼ねく〳〵聞ても、今更の感に打たれ候。然ど

も御老母様には兼々後生極樂の爲に平素念佛をよく稱へ候ひし事なれば、定めて九品蓮華の中に往生なされし事疑べ〻あらじと存候。直に御回向旁伺度存候處遠國の客も有之また今日は下總の國の寺の施餓鬼。何年目にて歸る樣な事であれば昇堂でき兼候間何れ歸京之上二十一日頃に御回向方々伺上候。

然るに唯々　宇宙の唯一人の　大御親樣を專ら念じて、神識をば永恒に照り輝く樂しき御國にて

如來樣のまたなき法を御聞きなされて、いよ〳〵佛道增進なさる樣も　みな樣も御念佛を專ら稱へなされて、御回向の程をねがはしく候。余は何れ御面語に申述べく候。御悔み旁々如斯に御座候　旬々頓首。

○

吾宗祖法然上人の御道詠に

あみ陀佛にそむるこゝろの色にいでば

秋のこずゑのたぐひならまし。

若し人常に五塵六欲の妄境にのみ心を染る時は、俗情野卑に化し已りぬべし。專ら聖德豐備の如來をのみ憶念する時は彌陀の光に心を靈化すべし。

獨乙の哲學者カント曰く、吾人が見る處の世界は自己の心を自己の眼前の境界として見るに外ならず。

赤眼鏡をもて世界を見る時は、萬物皆赤色を呈すと同じく自己の心にして已に如來の聖光に同化する時は。世界として淸淨界ならざるはなし。

法然上人淨業功つもり、修養年久しくし、彌陀の聖靈に同化し從來の人間的青色の心は一轉し、如來の神聖化したる內容にして若しもいろかに見ゆるならば秋のもみぢのたぐひならめとの意なるか。

修養の二方面

いかに修行してか成佛し得道し得べきやとならば、宗敎的精神修養に二面あり。一は消極的なると他は積極的なるとなり。消極的の修行とは先づ自己の胸中より群れ出づる處の一切の妄想妄念を除き去り、すべての心念起るあらば悉く放擲し、無想離念





の極　自から自性天眞あらはる。譬へば雲霧已に霽れて青天と爲る如し。一切の心念悉く盡きたる處、自然の本性のみ。此自性は　虛と同じく除き去るべきものにあらず。一心工夫し凝神修練して止ざる時は必ず此妙境に達すべし。之を理の念佛と爲す。

次に積極的の修養とは、心常に如來の神聖正義慈悲智慧等の萬德豐備なる心王如來を憶念し、一ら祈念し一ら觀念しまたは一心に工夫し、日夜を問はず行住坐臥を論せず、專念功積る時は必ず成ぜん。宗祖法然上人の內容の靈化したるが如くに、自己の一心が如來の眞理と致一し靈化する處の得道なり。

念々に神を凝し心々相續してついに妙をうるに至らむ。自から懷ける摩尼寶珠をして空しく塵中に乘つるなからんことをこそ。

心眼開き見よ眞理の太陽は萬古に赫々たり。

古人曰く池を鑿りて月を待たず池成れば月自ら來ると。

御たづねの書物

學說の研究としては原人論、起信論。

修行の要としては　淨土十要

其外種々あれども先づこれらを御しらべしからんと存候。

○

拜啓いまだ寒氣もさびしく候處此ごろ御動靜如何に御座候哉と案じ上候。旨て御書翰をいたゞき候ひしについに御無音いたし候こと甚だ懺謝し上候。本年は殊に寒さも甚だしき中、御主人樣にはいかゞにて候はん哉と大に案じ上候。また榊原御老母樣にはいかゞわたらせられ候哉よろしく御つたへを願上候。

信仰の言すこし物して進じ上候あいだ御よみ下され度取いそぎしためしことなれば御わかりがたきことならんと存じ候へどもいづれ歸京の際また御面語に御はなし申上べく候。思にかゝりながら延々にして御無音の段どうか御ゆるし下され度候。

○

蕭白先刻は久方ぶりにて御面會いたし、時間にせまり申のべたき事ものこり候。

先刻の一大事の安心の事につきては、他の事とは違がひ、生命に懸はる大事の事に

て候得ば、心に懸り候につき、歸りて直ちに一筆しめして申進候。

先程も申のべ候如く、安心決定の信心は、唯一時的の觀音や大師に對してその現世祈りのとは大に趣を異に候。

生命卽ち魂を献げて此世後世すべてを御任せ申上、我生命もはや如來の物とさゝげてこそ、此罪深き凡夫地獄一定の族なれども、一心一向に魂をさゝげて御たのみ申上ればこそ、みおや御慈悲、憐れに思召　御たすけたまふことにて候。已に生命をさゝげておたのみ申上もせぬで、たゞ口に稱名唱へれば、たすけ下さる事位ななまじゐの安心にて、いかにみおやの御慈悲でもたすけ下さる因緣はなき事に候。殊に他の神や佛に一心をかけて御たのみ申などと云ことは全く如來さまをかろしめることになり、侘の神や佛を御たのみ申た時に、如來さまの聖意から捨られた事に候。

一方に侘の神や佛を御たのみ申ことは尤もわるきことにて候、忠臣二君に仕へず、貞女兩夫にまみへずであります。命に懸けての安心を、かりそめ事のやうにおもひ込では眞の信心は出來るはづなき事にて候。

眞の信心なれば災難があらうとも命にかゝはる事が有らうとも、本より命をさゝげての上のことなれば、いかなる事情の爲にも、他の神佛にたのみを懸るはづは有べきはづはなく候。念の爲に御たづね申ますが、あなたは命にかゝはる事が有つても、已に如來にさゝげたる命なれば、決して他の神や佛を頼み申さぬと云ふ操の立たる安心が決定できるのでせうか。

若しそれはとても出來ぬと云ふ事なれば、

如來さまに對して此の世後の世共に永く御いとまをいたゞく事になされ候がよろしいと存じます。

私も左樣にせぬと如來さまに對して申譯なき事にて候。いかにしても他の佛神に誓をかける事は止める事はできぬなれば、いつはらずして眞實に正直に私に聞して下され。さうすれば重ねて如來さまの安心の事については已後御ゝめ申ませんから。何だか外の神佛にはたのみませんと今までだまされて居たやうにおもはれ候。

また此のちこちらでは一心に正直にたゞ〳〵此世から後の世まで、あみだ如來一佛





の外に御たすけ下さる御方はないと、どこまでも御すゝめ申して居るにかゝはらず。かくれて他の神や佛などを祈誓して居ると云ことを聞てはもはやこののちは、如來さまに對しても、あなたに、　如來さまの御慈悲を啓くべき　つながきれてしまつたのと存じます。

安心の眞實に美しいのは、たとへ命にかゝる事が有つても、　あみだ如來あなたの外に決して他の神や佛に御まかせ申ませぬ。あなたの外に私の　大みをやは有りません。あなたの外に私の魂を御まかせ申方はありません。

あなたの外に私のむねのうちを明して御たのみ申す方はありませぬ、と云ふ眞實の情操がうつくしいのである。たとへ火をあび水を渡り、日々に百萬遍の稱名をしても、魂をよそにむけぬ清き精神がなければ、

如來何ぞ御むねをそゝぎて下さるはづはなく候。まづは一大事なれば御たづね申候。

欽啓時分柄漸次御暑に向ひ候折、皆樣御動靜いかゞあらせられ候哉。御老母樣には引きつゞき御平生に回復なされ候哉。愚納御蔭にて無異に御仕え申上候間乍他事御休心被下度候。此程迄は熊本地方にて傳道し、また當地に歸り候。いつながらおもへば月日のすぎゆくことは、しばしも停まらず、年々春夏秋冬同じことをくり返しつゝ、年々に月々に此いのちはちゞまりゆくのみ、月日はまたくり返し盡ることなけれ共、人の身は再びかへりがたし。世の事々は今日は此事また明日は何々といふうちに、いつか再び明日といふことなきにいたるは必定免かれがたし。されば何はかにはの中に於ても唯々忘れまじきは、彌陀の名號にて候。

心配事出來れば出來るにつけ、悅び事につけても、彌陀の御慈悲をおもひては稱名すること肝心にて候。悅びも悲も苦しみも樂しみも何れも同じ夢幻のほど、何事も夢のなかに於て若も　大みをやの御本願にあふことなかりせば、あだにはかなき世に、明けても暮れても罪ばかりをつくり、罪障さんげの念もなく、地獄の業の薪を負ふて露ゆく外は無るべきに、大みをやの御慈悲にあへばこそ、罪つくりながらもさん悔も

なす。

日々見るにつけ聞くにつけ、心はけがれぬるも、

如來淸淨光にきよめられ、苦しみなやみも。如來の歡喜光にみなよろこびの心に立てかへていたゞくは、一にこれ如來の御惠にぞまします。實にありがたきは

如來の御慈悲にて候。尙申上度事候へどものちのたよりにゆづり候。

○

如來の聖きみひかりの中に
めでたき御年を御つもりなされ候よう、

一休和尙が

門松はめいどのたびの一里塚
　　めでたくもありめでたくもなし。

日々に聖き名によりて、きよき德をつみつゝあるひとのためには、德をつもりつゝ、終局目的の眞なる善なる美なる極の方に一日々々に進みゆくが故にめでたきなり。其反對に日々に罪ばかりをかさね、惡德をのみつみて、恐ろしき惡道に向ひゆくひとのためには、いやな方がちかくなるが故にめでたくもなしでありませう。

日々に一日も空しきなくいたづらなく、聖き旨によりてこゝろの德をつまれんことをねがふ。尙くさ〳〵申上候べくも後便にゆづり候。

○

此程來はながらくの間御心づくしの御もてなしに預り多謝候。さて月日の過ぎゆくことのはやき、もはや、今としも一月は何時の間やらすぎ去りぬ。ヅン〳〵と月日は先へ〳〵と進みゆきて而して太陽は一年にして年、同じ元日とは成ぬれど、人の命は先へ〳〵といそぎて少しもあとへはとまらぬ。はやく光明の中の日ぐらしとなりて雨ふらばふれ風吹かばふけいかに世の中は何には兎にかの憂世の風ははげしくもあら波は甚だしきも、大みおやの大悲の船に乘りえたる身は敢て恐るゝにたらず。

如來にはいかなる事いかなる大難にも大安慰の力あり。もはや精神は　悲の懷のすまゐ、形の上にいかなる事に出遇ふとも、それも心を研く器械であると勇氣を奮つて





事にあたれば、却つて安心にやれる事にて候。かたちの上にはいかに寒くもこゝろは溫かなる御慈悲の懷ろずまゐ、たとひ闇きやみの夜はこゝろは如來の光明のなかにと思ひて、一心ふらん執持名號、光明名號を稱ふれば自から心は光明かがやくように成り申候。

○

如來の御めぐみによりて安心いたし候人のこころは、くわんぜをんと同じ。くわんぜをんには頭上に如來安置し玉ふ。あみだ如來をつねに信念するひとのこころには、如來つねにやどり玉ふ故に、いか成ばあいにもこゝろうごかざるが爲にうるはしきいろを變ずることなし。

煩惱のほむらも如來の御めぐみを念ずるときは、たきつせに浴むごとくにいつしかやすらかに相成候べし。

○

いろはにほへどちりぬるを、桃もさくらも一さかり、げにあだし世のはかなさは、常なるものぞなかりけり。

一たびひらきてとこしへに、かはらでにほふはいときよき、ひかりによりてさきにける、人の心の花ならあ。

世の中の人の愚かさよ、無常といへば言葉にさへいみながら、無常なるものやさくらの花を、またなきものにめでて、心にさけるときはの華を見むともおもはで、こころをよそにのみさせて、生涯を夢のなかにくらしぬるとはあなあさましし。願くばあなたがたと共に心の華をながめんことをのぞむ。

○

如來のみめぐみのなかに、聖くいさぎよき御ひぐらしのほどいのり上候。如來の聖なるみひかりは晝も夜もとこしなへに照したまへり。

○

御名をよぶ聲にこゝろの雲はれて、さやかに見ゆる月の面かげ

眞晝中のあつさにもかゝはらず、朝夕のすゞしさ秋かせのものさびしさも鎌倉山の

草木にも見るなり。

この頃いかゞあらせられ候哉ついしゝ御無音に打過候、願くば、みひかりのなかによろこばしき御日ぐらしのほど是いのり候。

○

衆生ほとけを念ずれば　佛も衆生を憶念し玉ふ。如來は衆生を憐念して少しもいとまなきは　母の子をおもふごとくにて、大悲しばしもやすむなし。

○

拜啓其後は久しく御無音仕り此ほど歸京により御通知いたし候。昨日より二ケの寺院にまゐり布教のことなどばかりかたりて、今朝ほど御約束のことなれば心せはしくかたりつゝ歸院候ところ、御歸りに相成候よしうけたまわり遺憾に存じまた、折角の御出のところまことに失禮仕り候。愚衲は一昨年御わかれ申候てより三河國尾張美濃伊勢の間に於てけち緣候ひしに、ほとけさまは多くの淨き御國にまゐる同行の友だちを見つけ下されまして、愚衲はよろこびました。いたるところ御經をよむ人は出來候。みな經に說きし如き微妙嚴淨なる御國へ共に往ことを樂しみなば、此世の日ぐらしも樂しく候。さて今日は御老母さまと御同道にて御出相成しかゞ私が少しくおくれました爲に御目にかゝりて法の話などをいたしませぬことといたく遺憾に存じました。まことにゆかしきは同じほとけさまの御子といふべき兄弟たる姉妹たる念佛者にて候。たとへ身はここかしこへだつとも心は同じ御ほとけの光の中にすむおもひ有之候。また御經をよみなされ候ときは、身はここにありながら心は淨土の樂園にめぐりあそぶおもひにて候はん。

のここかしこ身はへだつともらぎりてし、心な經の園にあそぼむ。

○經をよむ聲にこゝろもさそはれて、たのしき園にめぐりあそばむ。

○

ミヲヤの大なる御めぐみを謝し、すべての同胞の幸をいのり候。さて先ころは御とりこみのなかにて御ねむころなる御意をわづらはし、かたじけなく謝し上候。其後御病貌如何にわたらせ候哉また御かつれは如何に哉、御食事は如何哉案じ申上居候。愚





衲このもよりの信者の信根を培養せむが爲に滯在し、明日は當家二十二日は誓願寺にてつとめ其後兩日ばかりは矢はりこの近處にてつとめ候。かま倉行は廿七八日まで延引のことにて候。

よろづを大なるミヲヤに御まかせ候て人事をつくして天命にまかせ候。すべてのことは出來るかぎりつくして、其己上のことは如來さまに御まかせ申ことが眞理にて候

○

拜啓御贈りもの今日到着候かたじけなく御禮申上候。愚衲こと御蔭にてかわりもなく有がたく感謝のなかに日を暮し候間御安心下され度候。月日のすぎゆくことしはしも休まらず、いつの間にやらんもはや此月も半過にけらし。古人が夢とやいわんうつゝとやいわんといはしも實とやさて、鎌倉の里はむかし武將の數代の間住したまひし處、歷失のみにかず〳〵ものされて殘りおりしも、今はさびしき草むらの、いわゆるもののふどもの夢のあとゝやらん、誰かいわぐことあれと、實に此草むらの中にも六百年のむかしは、いくばくの人たちがいかなる夢の見たるあとならんとおもへば、世の中は何にたとへんあさぼらけ。きりときえゆくさま實にしかし、世は無常なれどもあみだほとけのみは、かりなきいのち、まことのひかり、この光りといのちの中におさめられて、おこたりがちながらも感謝の中に暮しつゝある御互ひなれば、先世の中それこれと身につゐての病等のことは、にくゝはあれどやはり身にそふて居るものなればすてきらふとすれば、身を捨てねばならぬよふなもの、

御ほとけにまかせて心ばかりも安じ暮したく候和南。

○

この頃の御あつさことに酷敷候へば、定めて御難儀に候はんと推察仕候このほどは御不差にあらせられしよし時分柄御自愛のほど是祈候。さて朝がほの一もとの花もみな、ミヲヤの御惠の露によりて咲しものと思へば、その色その香いかにめでたきものぞ。されば古人も一色一香無非中道とて色も香もみな如來法身のあらはれなりとのべられし。

○

謹むで新禧を賀したてまつり候。去月昇堂よりつかたじけなく御禮申上候。

くりかへし同じ樣なものはかはりゆかねばならぬ。年　またも明て、一年三百六十餘日、矢張り同じように、くりかへすものゝ、其實日々刻々に變遷しつゝある御互の身にて候。一日は八億四千の念ありて、念々の中に、意に順へば貪り、意にかなはざれば瞋り、其佗は痴にて、うか〳〵と明し、暮しぬるたゞ三惡道の業のみにて候。と御佛はときたまはれし。どうかあたら時日をいたづらに過さず、こころにかけて不可思議功德なる、みほとけの御名をとなへつゝ、日を最し度候。念々同じ稱名ながら、あみだ佛よりは、無量光の德をもて、念々毎に、われらが無量の煩惱を亡して、無量の靈德をわれらにあたへたまふ。我ら三毒五欲のおもひも彼の佛は、淨清光にて、きよらかにいさぎよくさせたまふ。こゝろの空やかきくもり、天候常ならぬ時にも、歡喜光の光には、おもひの雲やはれて、さやかにてらす月を見ることのうれしきを覺ゆべし。こゝろ我にあれば是凡夫、おもひを轉じて佛にあれば是佛、一念佛を念ずれば一念の佛、念々佛を念ずれば念々是佛、南無無量不老不死尊。

よろこびのひかりのほどをしるときは
ねてもさめてもうれしかりけり。

○

アミダ如來に三身一體とて、もとは獨一にして三の身とわかれてあらせらるるのです。三身と申します一には法身二に報身三に應身と申す。この三身は本一體にてましますのです。法身と申ますのは天地萬物のすべての本にして、かたちあるものもかたちなきこゝろもみな此法身を本とするのであります。

實に天地萬物は日月や地球のめぐることにしても、其佗の地球の萬物が起きたりかくれたりするすべてのものが、ちやんときまりが有て毫しもその規則をたがへませぬのは、唯ひとりでにめくらめつぽうにかうなるのではありませぬ。この大もとが卽ち如來の法身であります。

法身とはかたちもなくすがたもなけれども、すべてのすがたもかたちもみな此法身から出來るのであります。





法身ははじめもなく終りもなく、何の處にもみち〳〵て有らぬ處はないのであります。其法身の本體から出ました天番萬物ですから、わたくしどもの身もいのちもこゝろも、みなそれをはなれては生れ來ることも出來ず、かうして活きて居ることも出來ず、何一として法身の本體を離れたものはありませぬのです。それで天地萬物の大なる備つけを以て生れていかされ居る。この一切のひとてふものは、目的なしではありませぬ。からだをそなへいのちをあたへ、こゝろをそなへ下されたので、ついてはこのこゝろを活きておるあひだに、まづそのことを深く心にかけて大なるめぐみをうけて、この心靈がいときよきかぎりなきいのちとかぎりなきひかりのたゞ光榮のみのきよき處にいたるのが、かうしてこの世に生れ出て人てふ身をうけ、たましひをうけたるものの目てきであります。しかればいかゞして其目的を達するのでせう。いかなる御方がこれをたすくるのでありませう。

二報身　前の法身てふも報身てふも本は一のアミタ如來にましませども、法身の力にて生れて保存せられをりしものをすくふときに報身てふ德をあらはして下さるのです。報身の如來はいときよきとふとき處にましまして、かぎりなきいつくしみとかぎりなきひかりとみちからを以て、あらゆる處をてらしまして、之を信仰するものを可愛ゆくおぼしめして御まもり下されてこゝろのなやみとわるきかすを取りのぞきて、靈化とて、心をよくなほし下されて、いといさぎよき生活をなさして、そうしてこのよのをわりには親しく尊きみをやのみもとにゆくのであります。そのみおやが卽ち報身のアミダ如來にてまします。

三惠身　と申ますは、前の報身の如來は夜もひるも何の處にてもいと大なる恩寵の光りをもて、すべてのものをいつくしみて、すくひあげよふとしてやらしわたらぬ處はなけれども、いかにせんわたくしどもの凡夫の目と心にはわかりませぬのざす。そこできよき處にまします報身如來よりこの世界の人々をたすけんが爲に、聖きたましひを分けて御出ましになりましたのは、すなはち、アミタ如來の分身にてまします釋迦如來にてあります。アナタはアミタ如來卽ちわたくしどものミオヤの御わかれでありますから、アナタの御生涯は唯たゞ愛てふもの一つであります。わたくしどもはた

とへいかほどの苦しみにあふても難にあふてもいかなることに對しても、アナタの御生涯の御こととどもを伏しておもひあげますれば、不足の念もぐちも何もかもなくなつてしまふのです。なぜなればアナタは、人爵としてはこの上もなき一天萬乘の位にましまし、富は四海をたもち國中の榮花を御自身にあつめることの出來る報を有ちながら、夫らのことをばやぶれぐつを捨るように思し召て、たゞ〳〵一切衆生の自分の心のまどひより己をなやまし、身をなやめ心をいためてこの世後の世くらきよりくらきにまよふものをたすけんといと深きいとかたき金剛の一心より、ついに王宮をのがれ出て山に入りて道を學ばんが爲には王の冠も珞瓔も悉くぬぎすてゝ、一重のけさが御身にまとひ、日々に一米一麻をもていのちをさゝへ、林の中に夜を明し樹の下石の上に座をしめて、たとへわれ身はくだけ肉はつきて、骸はしやりにならふがまゝよ、一切衆生の心靈をたすくることのみがまださとらぬうちは、うごかじとの一心つゐに上もなきさとりを得なされて、それからといふものは、衆生さいどの爲なれば、もろもろの外道邪見人のために刄をむけられ、あることなきこと種々のそしりをきはめられ、みちをひろめるさまたげをうけ、けれども衆生の爲なれば、毫しも心にかけるとこもなく、たゞ〳〵ミオヤなるアミダ來の御慼悲をすべての行と思と言ばとにあらはしましたのであります。全體しやか如來のさとりといふのは、いか成ものでありませう。何のためにあれほどのことが出來たのでせう。ソコが眞のきゝ處である。

一日如來靈鷲山にましまして法を說とするときに、何とも申し上げようもなきうるはしき御よそほひをしめしなさせられました時に　あなんてふ御弟子は釋尊の御よそほひを拜みまして申上ました。アナタは御こゝろのうちに何とも申上ようのない御よろこびをいだきてましますように御みうけ申上ます。それはどういふわけのでありませうと申上ますと、如來の仰るには、我はいつでも、尊きアミダ如來がわがこころの宮にましますのであるから、どのよふなことに出遇ふともそれはほんのうはの事、心の底にまします處のアミダ如來の靈はいつでも尊く聖かにましまして居らせらるゝから、それをおもへば外からくることなどがこころなにかゝるものぞ。是聖き靈がわが本尊である。是ばかりがいつも生きてまします如來である。わがこのからだはそれを





ひきさつてしまへば、あとは人の供養で保存しておるめしぶくろばかりである。われいま一切衆生のために、この聖き靈にまします、アミダ如來の愛をすべての物にわかちてやりたいのである。宇宙間いかに廣きも是なかつたならば何かある。

たとへわが肉體はけふにきえてしまふとも、いま我心の宮にまし〳〵て無限の愛光を以て、わがたましひとなり、活きてまします。聖きものはのち〳〵いつゝなりても常住でかはるものではない。肉體がなくなつてこの精靈ばかりに成つた時は、眞の極樂世界である。これがましませば肉體の苦しみもなやみもののかすではないと。

それであるから汝もよく存じて居るだらう。われはいか成る苦難にあふたときでもアワテたりビックしたり。色アヲザメタリまた火のようにイカリタリする擧動はないことは己にしりぬべし。是全くアミダの愛われにましませばなり。是が活きたる宗教である。是が眞の釋尊である、之を人々にわかちてこの中に復活せしめようとするのがわが最終の目的である。是が佛法のたましひである。譬へてみせようか。世の精神てふものが有るから、目や耳の活用あり、五臟六腑四支が悉くはたらくのである。若し魂が一つぬけてしまふたなら、五官も四支も知覺も運動もなくなつて、どれほどの知識も博藝も力量も辨方も何一つもなくなつてしまふだらう。宗教の靈もその如く、人の精神に感應して宿りたまふ如來の靈がとどまりまさずば五戒も十善も六はら密も四聖諦も十二因緣も十力も十八不共の法も一切智も金胎兩部の密法でも天臺の四觀でもなにもかもなくなつてしまふ。天に太陽がないやうなものである。この如來の靈こそわれ〳〵が本尊である。

さて先ほども申たる通り釋迦如來が昔の榮花をすてゝから、左ほどの苦難を自ら好んで受けて、わたし共をたすくるみちを御さとり下されたのですから、そのことを思ひ上ればわたくし共はそれほどのことでもあきらめがつかぬわけはないのです。けれどもそうゆかぬは凡夫とほとけとのちがひがあらからだらうとおもひなさるでせう。

そうではありませぬ。そればかりでは心はできるのでありません。それは成るほど釋迦如來の苦難のことをおもへば、少しはあきらめはつくかはしらねども、そればかりではしかたなしのあきらめにて、一時安んずるかはわかりませぬが、夫ればかりでは

御おしへの本意ではありませぬ。實際にしやか如來が思し召しに成りますれど、いか成ものにも身よりもいのちよりも何より天地にもかへ難きアミダ如來の聖き靈によりて人の魂を生れかわらせて、人々のこの身が即ちいける如來の本堂とするのでありまず。眞に如來を信じ深く愛して如來の御こゝろを欲みますると、アナタは常に其人の心の宮にましまして、なげきにはなぐさめの聲となり、いかりの炎には清き雨となる。うきが中には安かれよとの御手を玉はれ、よきことには爲せよ〳〵、いさみてせよ、しりぞくなといふようにおもはるる。わるきことにはわが心にやどり玉ふ靈の御聲はなすな〳〵とおもはるる。くらきにも心にあかるきを與へ、おそろしきにも安きを與へ、すべての眞といと高き善といと美しき德とは是より生じて來ますのです。これを得れば身はこゝに居ながら魂は聖衆であります。いか成ことでもやせがまんでなく、よろこんでしのぶことできます。なやみにも憂きにも、そは浮き〻身にあること、心のおくには聖き光になぐさめられます。古人のうきことのかさなる身こそうれしけれ。聖きめぐみのたよりとおもへば。ともいはれし人さへあります。

よきこともあしきことにもうきにもよろこびにもみな、如來の聖き光り尊ときおぼしめしをおもふて、それに引かへてしまふのであり、聖き御名をとなへて其の尊き思召が自己のこゝろにあらはるるよふに御祈りなされ候ことが最肝要にて候。

大正十三年四月十二日印刷同月十五日發行
誌代年七冊壹圓貳拾錢　年十二冊貳圓
編輯兼發行人　山崎辨成
印刷人　東京市小石川區茗荷谷町三十七番地　中川退司
發行所　東京市小石川區水道端二丁目四十四番地　ミオヤのひかり社
振替東京六六八五一番